

ボランティア OSAKA 離れていてもできる災害支援のカタチ



府社協では、4月から大阪府災害ボランティアセンター（以下、災害VC）を常設化。ネットワークや経験などの災害基盤をベースに、「つながりづくり」「ひとづくり」「たいせいづくり」を軸にした平時からの仕組みづくりを行っています。

今回は、災害ボランティア活動とその実践を紹介します。

災害ボランティア活動は被災者主体

8月3日からの大雨や台風14・15号被害に対して、全国各地の社会福祉協議会で災害VCが設置されました。災害VCの活動が終了した後も、通常のVCを通じて被災者の支援を続けていきます。

災害時に第一線で活躍するのが災害ボランティアです。「防災ボランティア活動とは、地震や水害、火山噴火などの災害発生時から復興に至るまで、被災地のために復旧・復興のお手伝いを行うボランティア活動を指す。家屋の片づけや炊き出し等の直接的な復旧支援のみならず、被災者の活力を取り戻すための交流機会づくりや被災者への寄り添いなど、被災者ニーズへの対応を中心とした活動を行う」と、内閣府は定義しています。

つまり、家屋の片づけや災害ごみの搬出などのハード面の支援だけでなく、

災害支援の多様なカタチ

平成30（2018）年大阪北部地震では、府内市町村の7カ所で災害VCが設置され、災害発生当初は家財の移動や整理・がれき処分などのニーズがありました。その後、サロン活動の支援など、被災者の心のケア、被災者間につながりを大切にした活動に徐々に変化していきました。

このような直接的な支援以外にも、できる支援のカタチはたくさんあります。今回紹介する「写真洗浄」もその一つです。

写真洗浄とは、水害などで被災した写真を1枚1枚丁寧に洗浄し、持ち主にお返しする活動です。被災地から預かることで、現地以外の場所であらう

災害VCのHPはこちら



被災者への寄り添いなど、心のケアも考えることが大切ということ。被災者の気もちを十分に配慮した被災者主体の支援を心がける必要があります。



あらいぐま大阪運営スタッフの篠原一夫さん（左）、篠原佳代子さん（中央）、田中睦美さん（右）

写真洗浄を広めたい

西日本豪雨から4年経過しましたが、いまだ洗浄依頼は絶えず、「写真を捨てなければよかった」「もっと早くに知っていたら」といった声も多くあります。

「実際に持ち主に会って直接写真を渡すことができた瞬間は忘れられません。きれいになった写真を見て、

は活動を続けることはできません」と感謝の気もちを表します。

「写真洗浄は被災者の思い出にふれる活動です。被災者の中には過去の全てを失ってしまった方もいます。少しでも思い出を救うために活動を続けていきたい」と、ボランティアの一人は意気込みを語ります。

平時からの取り組みを

このように、現地以外でもできる支援など、災害支援のあり方は多様です。災害は毎年のように起こっているため、目先に意識が向けられてしまい、過去の災害は時間とともに忘れられてしまいがちです。

しかし、災害の発生から数年経っても仮設住宅での生活を余儀なくされ不安を抱え続ける人もおり、継続した支援が必要。

常設災害VCでは、災害時の活動だけでなく、平時の備えや継続した支援を強化するため、府域のつながりを生かした体制づくりをすすめています。

あらいぐま大阪の情報はコチラから！



Facebook

活動のようすや参加申込はコチラから



このコラムは、地域で活躍する民生委員・児童委員（以下、民生委員）さんにスポットを当て、その方の思いを紹介します。今回は、地元で生まれ育ち、定年退職後から活躍している堂本さんにインタビュー。活動で大切にしていること、今後の抱負について聞きました。

● 今日のことは今日のうちに

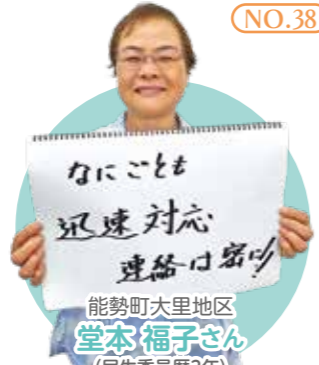
地域で気づいたことがあれば、その日のうちに社協や行政などに相談し、支援につなぎます。民生委員は専門職が気づきにくい日常のわずかな変化を伝える役割。「今日のことは今日のうちに」。スピード感を大切に、関係機関との連携を生かした支援を心がけています。

地域には、高齢夫婦と息子や高齢者の二世帯など、身体・経済・生活状況の変化により、支援が必要な状態になっても自ら相談できず、支援を拒否する方もおられます。専門職と連携し、自分の介護経験を伝えながら、地域住民として家族や本人の気もちに寄り添い、今後の支援と一緒に考えます。

地域で活躍する

民生委員・児童委員さん

NO.38



Q 質問数珠つなぎ

Vol.37 川村さんから質問
地域住民の悩み事にどこまで対応したらいいか？

A 私生活に深入りしないよう気をつけながら話を聞き、行政と情報共有します。

● やりがいは多く

コロナ禍で中止期間が長かった子育てサロン。再開後に会う子どもたちの成長に元気をもらいます。また、高齢者の方に送付した年賀状を宝物のように大事にしてくれる姿にやりがいを感じます。この年賀状は、昨年、福祉マップを作成した時に、調査票で「今は支援が必要ない」とされた80代の方と、支援対象の高齢者に送りました。

● みんなが仲良くなれるように

今の目標は、コロナ禍で積極的に声かけできていなかった100歳体操の参加者を増やすこと。毎週開催しており、高齢者の癒しとストレス解消の機会になっています。

能勢町も民生委員のなり手を探するのはひと苦労。地域の活動をつなげるために、在任中に委員の候補者を探しながら、「地域のみんなが仲良くなり、助けあえる」そんな地域をめざし、これからも活動していきたいと思っています。

でも誰でも取り組むことができます。大阪市内で活動する、真備町写真洗浄@あらいぐま大阪（以下、あらいぐま大阪）さんに話を聞きました。

離れていてもできる被災地支援

あらいぐま大阪は、篠原一夫・佳代子夫妻と田中睦美さんが、平成30（2018）年7月の西日本豪雨をきっかけに、翌年6月末に立ちあげたボランティアグループです。真備町をはじめ、被災各地から届けられた写真を洗浄し、返却しています。真備町で経験し、「地元・大阪で活動して、写真洗浄を多くの人に知ってもらいたい」と感じた

ことがきっかけです。

毎週日曜の午後に活動しており、中学生から仕事をリタイアした方まで幅広い年代のボランティアが活躍しています。1枚1枚の写真に真剣に向き合いながらも、和気あいあいとした雰囲気から、続けて通う方もたくさんいます。

ボランティアに支えられて

活動を進める篠原佳代子さんは、「コロナ禍で活動がままならない時期もありましたが、参加者が少しずつ増え、活動が認知されてきていることをうれしく思います。毎週のように参加してくださる方もいて、ボランティアの力なしで



仕上げ作業は丁寧に！